



江青転変 歴史のうねり

はなやかだったころの江青女史。1960年代半ば文革の当時(UPIサン)

「この夜、衛軍中継に映し出された江青女史は黒っぽい人民服姿。イヤホンをつけ、小首をかした独特のポーズで時折、イヤホンに手をやり、落ち着き払った様子。しかし、江華最高人民法院特別法廷裁判長が「執行猶予付き死刑」の判決を言い渡した瞬間、「革命無罪」と大きく叫んで最後のあらがいを見せた。そして、廷吏がすかさず手錠をかけたあとも「造反有理」と言い続け、これまでの公判で「わたしの首が欲しいんでしょ」とうねり、天宮門広場で公開処刑して「ごらん」とうねり胸を張った態度は、この日の判決公判でも変わらなかつた。

「大きな歴史の流れを感じました」と松山バレエ団の清水正夫

「この夜、衛軍中継に映し出された江青女史は黒っぽい人民服姿。イヤホンをつけ、小首をかした独特のポーズで時折、イヤホンに手をやり、落ち着き払った様子。しかし、江華最高人民法院特別法廷裁判長が「執行猶予付き死刑」の判決を言い渡した瞬間、「革命無罪」と大きく叫んで最後のあらがいを見せた。そして、廷吏がすかさず手錠をかけたあとも「造反有理」と言い続け、これまでの公判で「わたしの首が欲しいんでしょ」とうねり、天宮門広場で公開処刑して「ごらん」とうねり胸を張った態度は、この日の判決公判でも変わらなかつた。」

団長へのほ、その印象を語る。清水さんは、江青女史に会ったことのある数少ない日本人の一人。最初の出会いは、さる三十九年、松山バレエ団が「祇園祭」の公演で北京を訪れた時で、文革中の四十八年にも中国の現代革命バレエ「紅色娘子軍」のレッスンと公演を兼ねて訪中し、江青女史に会ったという。

その時の江青女史の印象は「地味で、とてもおとなしい人でした。そんな女史が文革中の罪状で裁かれたわけだが、清水さんは「文革がどんな時代だったか、私たちが最近になって知った。今回後述の姿を予測できたのだろうか。江青女史が女優をしていた上海時代の芸名は藍蘋(らんぴん)。」

「私は、文革も今回の裁判も、毛沢東主席を中心とした家父長的政治体制の悲劇だと思う。江青女史という個性の強い、エキセントリックな性格の女性に、裁判もまた振り回された。裁判自体、毛沢東の責任を追及しない部下だけを糾弾する大きな矛盾をかかえていたから江青女史はその矛盾を最大限ついた。中国人たちの中にも、江青はさすがだと考える由があるのではないだろうか。ウ

「革命は無罪だ」。江青女史に「執行猶予付き死刑」の判決を下した北京の特別法廷の模様が日曜日(二十五日)夜、日本のお茶の間のテレビにも衛星中継された。上海の一女優から故毛沢東主席と結婚してトップレディーに、そして紅衛兵を率いて文

化大革命の嵐を巻き起こし、いま、判決に抗議の叫びを上げる江青。被告「明から「暗」へ」「世紀の裁判ショー」は、はからずも波乱万丈の江青女史の半生のドラマを浮き彫りにした。そこに、隣国・中国の歴史の大きなうねりを感じる人も多かった。

女優▼トップレディー▼死刑判決

生きざま生々しく

電話ニュースは
03 540 1121

春休みに贈る楽しいコンサート

音楽を通して青少年の情を開通します。思い切ったまた、楽器紹介をかねた楽

読売日親と子

3月28日(土) 午後、午後

3月29日(日) 午後、午後

3月30日(月) 午後、午後

指揮・三石精一

ピアノ・花房晴美

「セビリア」の理
歌劇 影曲

ロッシェニ

イトケ著「江青」を翻訳した中島嶺雄東京外国語大教授はそう語る。

一方、ある時期、「民間大使」といわれた西園寺公一さんは「文革中、私たちは江青にだまされていた。彼女は文芸面の先駆者としてふるまっていたが、四人組の逮捕後、毛沢東主席の指示を装って彼

女が犯した罪が、いかに奥深いものだったか、わかってきた。裁判での江青の態度が立派だったという人もいるが、そんなのは浪花節で、私は死刑が当然だし、執行猶予も付けなかった方がかえってスッキリしたと考えています」という意見だった。